

## ま と め

1. 当科における大腿骨頸部骨折術後患者の退院時歩行能力に影響を与える因子について調査した。
2. 退院時歩行能力にもっとも影響を与える因子は、痴呆の有無である。
3. 痴呆を合併症にもつ患者の対策として術後の早期離床、PT実施中のマンツーマン指導が重要である。

本論文の要旨は第35回全国自治体病院学会(埼玉、1996年)に於いて発表した。  
本論文を御校閲頂きました故小林昌幸先生の御冥福をお祈り申し上げます。

## 参 考 文 献

- 1) 金子義弘、他：佐渡における大腿骨頸部骨折受傷後の移動能力と生存率の関係。理学療法学23：518—521, 1996.
- 2) 水島繁美、他：大腿骨頸部骨折のリハビリテーションと老人痴呆。総合リハ13：271—275, 1985.
- 3) 行田善仁、他：大腿骨頸部内側骨折に対する人工骨頭置換術例の予後。整・災害32：1081—1087, 1989.
- 4) 山口昌夫、他：大腿骨頸部骨折のリハビリテーション。リハビリテーションマニュアル、日本医師会雑誌臨時増刊112(11)：41—48, 1995.
- 5) 対馬栄輝、他：大腿骨頸部骨折患者における退院時機能の構造。PTジャーナル26：417—421, 1995.
- 6) 大沼信一、他：高齢者(70歳以上)の大腿骨転子部骨折手術例の検討。東日本臨整会誌7：298, 1995.
- 1) 金子義弘、他：佐渡における大腿骨頸部骨折受傷後の移動能力と生存率の関係。理学療法

## 薬剤師であること

深 井 康 邦

「人は人によって人を成す」の言葉がある。

私の先生であり、いくつか年上だが同世代であり、良き相談相手であった東邦大学薬学部臨床化学教室助教授、河崎秀樹氏が亡くなってから4年になる。たいそう不出来な私を薬剤師に仕立て上げた功労者の1人である。「深井君が、よく国家試験を通ったものだ」と恩師の由岐教授も言ったという。

時を経て、彼らは私が病棟で服薬指導をしている話を楽しそうに聞いていた。彼らを見ているうち、学生の頃を思い出した。ごくごく一部の薬剤師が医薬分業を肯定的に、大部分は夢のまた夢、いや夢とも思いもせず薬という商品売り「現実には甘くない」を合言葉にしていた。病院薬剤師は調剤する人。それ以上でもそれ以下でもない。確かなのは、医療スタッフの中に薬剤師のイメージはなかった。その中で、私は薬剤師の資格を得たのである。

薬剤師にとって服薬とは何なのか、その問いは思いがけず、一人の看護婦から出た。もう13年も前のことである。「医師は治療の説明をし、看護婦は看護によって患者に近づこうとしている。なぜ薬剤師は自ら作った薬の説明をしようとししないのか」多くの病院薬剤師がそうであったように、私も姿を見せず、言葉も吐かない調剤マシンであった。私が今、薬の説明に費やす時間はその問いへの解答である。同時に薬の害から患者を守ろうとする薬剤師の一つの試みである。しかし、患者から見ると調剤と服薬指導は表と裏である。服薬を続ける効果と、副作用におびえて中止する矛盾によって浮き出てきた結果が、社会のニーズになったにすぎない。

近頃病棟には、薬剤師を待っている患者がいる。そして、医療スタッフが待っている。「スタッフには各々持ち場がある。同じ事を言っても受け取る側の重みが異なる」とは循環器内科の佐々木婦長の弁。「なるほど、薬剤師がそう言うのなら、納得できる」と話す患者達。いかに自らが自らの仕事を放棄してきたかを知らされる。

今、私は、医師達や、看護婦達の心配りの中で薬剤師として仕事をしている。そして、薬剤師を医療スタッフの一員と認めている患者達がいる。それに答えていかなければ、医療スタッフの中から薬剤師のイメージが、再び消えてしまう。そこで、「薬剤師は、患者、医師、看護婦によって、薬剤師を成す」と言葉を変えることにする。

薬事新報 No.1951(1997) から 抜粋